



未来は目指すものであり創るもの

■ 安宅 和人

3年前は講演で呼ばれるとビッグデータばかりだった。いまはAI（人工知能）とシゴトの未来、そして世の中の未来一色だ。国の審議会、委員会でも、未来についてばかり議論している。シゴトの未来、産業の未来、必要になるスキルの未来、AIの未来、などなどだ。

しかし僕らの多くは知っている。数秒後とかならともかく、未来の本当の姿など誰も予測できないということ。人工知能となんだか似た響きだけれども、ちょっと違う隣の分野に人工生命の領域がある。コンピュータ上でモデル化された生命がいて、これらが生き延びていく。突然変異も仕込めるし、捕食関係も仕込める。膨大な世代を繰り返す、進化する姿も見るができる。とても興味深い領域の一つだ。

以前、ある教育系テレビ番組で流れていたが、そこでコンピュータ上の生命を何種類かおいて、それらがどのように進化していくかを見ていくと、初期値やモデルが同じでも毎回違う結果になる。まったく同じ結果は二度と起きない。多くの人にとって、これはちょっとした驚きだ。未来は予測できないということだからだ。シンプルにモデル化された世界でもそうであるということは、我々の生きているような遥かに要素が多く、入り組んだ世界であればもっとそうだということは自明だ。そもそも我々の生きているこの系（地球の表面）は必ずしもクローズなシステムですらない。太陽のフレアや地質変動などの外部影響を常時受けているからだ。

その番組に出ていた人の一人は「これって地球の歴史が繰り返されたとしても、二度と同

■ 安宅 和人

ヤフー チーフストラテジーオフィサー (CSO) / 慶應義塾大学 SFC 特任教授 / データサイエンティスト協会 理事・スキル委員長 / 応用統計学会 理事

イエール大学にて Ph.D. (脳神経科学), マッキンゼーを経て現職。 国関連では人工知能技術戦略会議 産業化ロードマップ TF 副主査, 経済産業省 産業構造審議会 新産業構造部会 委員ほか。 著書に『イシューからはじめよ』(英治出版, 2010)がある。



じ人類は生み出されないということですよ?」と実にもっともな反応をされていたが、これは僕らの未来についても当てはまる。

もちろん、技術の進展の太筋の方向性は見える。たとえば、僕が今、産業化ロードマップづくりでかかわっている人工知能分野関連であれば、識別・予測から実行(作業)における暗黙知の取り込み、そしてイミ理解/意志 like な世界への展開などだ。ただ、これが生み出す未来は予測できない。

産業はそこにある課題とその課題を解決する技術、方法の掛け算で生まれる。課題がどうなるかが変わると当然のように中身は変わる。また実現するアプローチがちょっと変わるとまたまったく違う世界がやってくる。よく考えてみると、そんなことは iPod が生まれた 2001 年から僕らは知っている。ワクワクをカタチにする方法なんていくらでもある。でもどれが当たるかなんか誰もわからないだけだ。

でも未来は目指すことも創ることもできる。課題がある、技術がある。その組み合わせ方も、問題の解き方も自由だ。ダーウィンが言ったように、生き残るのは最も強い種ではなく、最も変化に対応できる種だ。そして一番いいのは、未来を自ら生み出すことだ。振り回されるぐらいなら振り回した方が楽しいに決まっている。

未来は目指すものであり、創るものだ。

